

## ダルモーツタラによる分別知の考察

石 田 尚 敬

### 0. はじめに

ダルモーツタラの『アポーハプラカラナ』(以下 AP) は、仏教論理学派の言語哲学を代表するアポーハ論を専門的に扱う著作として知られる。ただし、本稿では、同著における分別知(概念知)およびその対象についての考察に焦点を絞り、そこに見られるダルモーツタラの独自性と思想史上の貢献を指摘する。

### 1. ダルモーツタラの基本的見解

ダルモーツタラは、AP の帰敬偈において、著作の主題を要約している。ダルモーツタラの基本的立場を今一度確認しておこう。

概念知により、他の諸々のものとは区別されたもの (*rūpa*) として描き出されるもの、(それは、) 知でもなく、外界(対象)でもない。まさにそれは、非真実の虚構されたものに他ならないと述べられ、世人に真実を語られた、あらゆる過失という敵に勝利する者。その教示者に叩頭して帰敬した後、この(論書)で、そのアポーハが、詳述される。(cf. 石田 forthcoming)

本詩節では、概念知によって描き出されるものが、知でもなく、外界対象でもないことが明言され、それは、非真実の〈虚構されたもの〉と述べられる。この点は先行研究でも繰り返し触れられてきたが、本稿では、概念知の対象となるべきものが、もの/性質 (*rūpa*) といういささか中性的な語で表現され、〈形象〉(*ākāra*) や〈顕現〉(*ābhāsa*) といった説明がなされていないことに留意しておきたい。

### 2. 概念知の対象の把握方法——直接知覚との対比から——

AP では、経量部の立場が採用され、外界対象の存在を容認しつつ議論が進められる。ダルモーツタラは、認識とその対象の関係について、「個々の実在は、(ある認識の)〈顕現〉(*snañ ba*) との肯定的・否定的随伴関係に従うならば、(その)認

(78)

ダルモータラによる分別知の考察 (石 田)

識の対象と認められるが、従わなければ対象でない」(AP 236,12-14) という原則を提示する。知覚知 (*pratyakṣa*) の〈顕現〉は、外界対象、すなわち個別相 (*sva-lakṣaṇa*) の存在と対応することから、知覚知は、個別相の〈顕現〉を有すことによって、個別相を対象として把握すると認められる。一方、概念知の〈顕現〉は、外界対象の存在と対応しないことから、その〈顕現〉によって外界対象を把握することはなく、確定 (*ñes pa*) という働きによってその対象を把握するとされる (AP 236,10-21)。特に、語を聞いて生じる概念知は、外界対象 (個別相) の知覚に後続せず、外界対象が無くとも存在することは明らかであろう。概念知は、〈語と結びつく対象〉を確定するのであり、そのような〈虚構されたもの〉を確定して生じる際に、実在を確定したかのように理解されると説明される。したがって、概念知は、個別相を確定することはなく、存在しないもの (非存在) を確定の対象とするとされる (AP 237,2-26)。

なお、上記の説明では概念知の〈顕現〉という表現が用いられたが、概念知によって〈把握されるべき形象〉(以下〈所取の形象〉) という語も、同じ文脈で、交代可能なものとして使用される (AP 236,22-25)。ダルモータラが概念知に〈顕現〉ならびに〈所取の形象〉を認めていることを、ここで確認しておきたい。

### 3. 概念知の把握対象

ダルモータラが概念知に〈所取の形象〉や〈顕現〉を認めていることは前節で確認した。では、それらは概念知とどのように関わるのか。

(概念知の)〈所取の形象〉は、自己認識の対象であって、概念知の(対象)ではない。すなわち、確定されるもの、それが概念知の対象である。〈所取の形象〉は、確定されるものでないならば、それがどうして概念知の対象となろう。したがって、概念知は、〈語と結びつく対象〉を確定するけれども、それ自身については、概念化されないものである。(AP 237,28-238, 1)

ダルモータラによれば、〈所取の形象〉は、概念化されるものではなく、直接知覚の一種である自己認識の対象とされるべきものである。ここで、「語と結びつく対象」と述べられているものは、〈虚構されたもの〉に他ならない。ダルモータラが概念知に〈所取の形象〉と〈虚構されたもの〉という二つの要素を認めていることは本稿ではっきりと指摘しておきたい。また、概念知の〈顕現〉もまた、〈所取の形象〉と同一視されることも看過されてはならない。

#### 4. 概念知の〈所取の形象〉と〈虚構されたもの〉

ダルモータラを理解によれば、概念知には〈所取の形象〉と〈虚構されたもの〉という異なる要素が考えられる。そして、知の〈顕現〉もまた〈所取の形象〉と同一視されている。さて今、これらの関係は、ダルマキールティの主著である『知識論決択』(PVin) 第2章の一文を解釈する中で導き出される。

(推理知, =概念知)は、自らの〈顕現〉(*pratibhāsa*)である対象でないもの(*anartha*)を対象(*artha*)と思い込こんで(*adhyavasāyena*)生じるから。(PVin 246,7)

ここで、ダルマキールティが述べた「顕現」(*pratibhāsa*)は、ダルモータラに取っては〈所取の形象〉と解する他はない。ダルモータラは、「思い込み」(*adhyavasāya*)という働きを、1. 把握(*grahāṇa*)、2. 作為(*karāṇa*)、3. 結合(*yojanā*)、4. 付託(*samāropa*)という4つの選択肢に分析し、順に検討する。概念知は、自らの顕現という対象でないものを(外界)対象と把握することはできないことから、第1の選択肢が否定され、同じく顕現という対象でないものを(外界)対象にすることは不可能であることから第2の選択肢が否定され、対象でない自らの顕現を把握されていない個別相に結び付けることはできないことから、第3の選択肢が退けられる。最も重要な議論は第4の選択肢に対するものであり、以下のように述べられる。

概念知は、先に自らの顕現(*snañ ba*)を直接経験(認識)して、後から付託することもない。第2の瞬間(刹那)に存続する実在はないから、それ(概念知)は、どうして先に直接経験されたものを、後から別の対象に付託しようか。あるいは、(概念知)自身の特質(*rañ bzin*)を直接経験することと、対象に付託することが同時ならば、それならば、顕現を直接経験するのと同じ時点の〈付託〉は、〈顕現するもの〉ではないから、非実在(*dños po med pa*)が概念知の対象領域であることとなり、それは(我々に)認められるものである。(AP 238,15-22)<sup>1)</sup>

以上のような考察を経て、ダルモータラが概念知の対象である〈虚構されたもの〉を、概念知の〈顕現〉ないし〈所取の形象〉とは異なる「非存在」とする結論を導き出したことが知られる。ダルモータラは、上述のPVinの一文を再度引用した後(AP 238,22-23)、以下のように結論する。

(「思い込み」とは、)そのような〈虚構されたもの〉と〈所取の形象〉を区別して理解しないという、このような意味である。(AP 238,23-25)

ダルモータラもまた〈思い込み〉を付託と解釈する立場を否定していない。しかしながら、直接経験された形象が付託される(=重ね合わせられる)のは、〈顕

(80)

ダルモータラによる分別知の考察 (石 田)

現〉ないし〈所取の形象〉と同時にあるもの、すなわち、それ自体は非存在である〈虚構されたもの〉というのが、ダルモータラ独自の見解である。

## 5. 概念知の構造

それでは、ダルモータラ自身の言葉による概念知の説明を参照しよう。

無明を本質とする諸々の概念知の特質は、以下のようなものである。(概念知は、概念知)それ自身を、〈形象〉(*rnam pa*)を備えて存在するものと示し、絶対的に存在しない対象についてもまた、経験されたことのある事物と同じように存在するかのように示すものである。(AP 239,26-30)

ここでは、概念知が〈所取の形象〉を備えていることと、非存在である〈虚構されたもの〉を表しだすという二面性が述べられている。また、概念知はそのような〈虚構されたもの〉をかつて経験した個別相と同じものとして示す働きも有している。

## 6. 知の影像 (*pratibimba*) を概念知の対象とする立場への批判

以上でダルモータラによる概念知の理解を見てきたが、これまでの分析を確認するためにも、知の影像 (*pratibimba*) が概念知の対象であるという見解に対するダルモータラの見解を見てみたい。ダルモータラにとり、〈影像〉もまた知に属するものである限り、知の〈顕現〉や〈所取の形象〉と同一視される。したがって、知の〈影像〉が概念知の対象であるという見解は否定されることになるが、ダルマキールティが〈影像〉が語や概念の対象となることを容認している点は問題とされる。ダルモータラは、『知識論評釈』の一節を引き (AP 239, 1-6)、以下のように自説との整合性を保とうとする。

…云々と説かれたすべてのことは、(知の)〈形象〉と〈虚構されたもの〉を異なったものとして決定することがないために、ひとつであるという言語表現を許容して説かれたものと見られる。あるいはむしろ、そのような立場においては、〈虚構されたもの〉に対して「影像」と言われたのであって、〈所取の形象〉に対して(「影像」と言われた)ではない。(AP 239,7-11)

ここでは、ダルマキールティは知の〈形象〉と〈虚構されたもの〉を区別せずに論じているとされる。しかし、あくまでもダルマキールティは〈虚構されたもの〉に対して「影像」という語を用いていると説明される。このような事実は、ダルモータラが〈所取の形象〉から〈虚構されたもの〉を独立させ、それを虚

妄かつ非存在として明確化したことを逆説的に示しているといえよう。

## 7. 結語

最後に、本稿で指摘したことを纏めておこう。

1. ダルモータラは、〈顕現〉、〈所取の形象〉といった語を厳密に用いており、それらは認識の一部として実在性が認められ、自己認識の対象とされる、一方、概念知は〈虚構されたもの〉を対象とするが、それは〈顕現〉ないし〈所取の形象〉と同時にあり、それ自体は非存在で虚妄なものである。
2. 概念知およびその対象が虚妄なものであることは、仏教論理学派だけでなく、仏教思想家にとっての共通理解であろう。ダルモータラは、概念知の構造を厳密に分析することにより、〈形象〉と〈虚構されたもの〉を区別することに成功した。それは思想史上、意味のある発展が認められるものである。

---

1) 本引用に関しては、サンスクリット語テキストが一部知られる。Cf. 赤松 1984, 76–77; JNĀ 229, 25–330, 2. 本テキストの解釈については、片岡 2013, 70–73 に詳しく考察されている。

### 〈略号〉

Anyāpohaprakaraṇa (Dharmottara): Erich Frauwallner, ed., in Frauwallner 1937, 235–254. Jñānaśrīmitranibandhāvali: Anantalal Thakur, ed., 2nd ed., Patna, 1987. Pramānaviniścaya (Dharmakīrti) 2: Ernst Steinkellner ed., Beijing–Vienna, 2007.

### 〈参考文献〉

Frauwallner, Erich, 1937: “Beiträge zur Apohalehre. II. Dharmottara,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 33, 1937, 233–287. 赤松明彦 1984: 「Dharmottara の apoha 論再考——Jñānaśrīmitra の批判から——」『印度学仏教学研究』33 (1), 1984, 76–82 (L). 石田尚敬 forthcoming: 「ダルモータラ著『Anyāpohaprakaraṇa』の冒頭偈について」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社 掲載予定. 片岡啓 2013: 「Dharmottara は Apoha 論で何を否定したのか？」『南アジア古典学』8, 2013, 51–73.

(平成 25–26 年度科学研究費補助金・研究活動スタート支援による研究成果の一部)

〈キーワード〉 ダルモータラ, 『アポーハプラカラナ』, 分別知, アポーハ  
(東京大学特任研究員, PhD)